

べているが、『太平御覽』に記載された『文子』の胎發生論の注にも、実際の知識によると考えられる記述がある。胎觀察の記録はないものの、流産などで胎児を見ていた可能性は確かにあるだろう。一方で五代宋金代は運氣論や仏教の影響も大きかったようだ。

私たちは十月十日という時間を、母親の胎内で過ごしてきた。数百万という数の精子の中から選ばれたたった一つが卵子と出会い着床する。着床したばかりはただの細胞の塊であった私たちは、約二八〇日という時間をかけて、生まれる準備をしていく。神秘的な胎児の成長をどのように捉えてきたのか、その歴史が本書には記されている。

(鈴木 千春)

〔思文閣出版社、千六〇六一八二〇三京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五—七五—一七八一、二〇〇六年三月二五日、A五版二四七頁、定価二八〇〇円(税別)〕

三枝 純郎 著

『肛直外科迫害史』

この本の著者はJ R 静岡駅の近くで開業しておられる。標榜は表紙にあるごとく、大腸排便科であるらしい。最近、横浜で標榜科目に「乳腺」を入れたところ、監督官庁から厚生省が認可した標榜科目の中に乳腺はない故これを削除

せよと命じられ、不満であると裁判をおこしたが決着は一八年秋にはついていない事件があった。そのさ中にこの本を手にしたからまずドキッとした。

「肛直外科」という名称は、一般にいう直腸肛門科であるのだが、著者によれば日本語の中の「痔」と「肛門」は侮蔑羞恥語の最たるもので、これがあるために患者さんの原始的羞恥心が、どれほど無意味に煽り立てられ、これまでは何人の直腸や大腸ガンの方が早期受診の機会を失い、致命的結末を迎えざるを得なかったか。こういう現実の中で外科技術の進歩により、早期受診さえすれば、これらのガンは殆ど死ぬことがなくなった。よつてまず第一に「痔」は廃止・抹殺、「肛門科」は「下部消化器科」又は「大腸排便科」と改称が必要である。第二に、改称に当って患者さんに国際的な学識を得てもらい、マスコミ等の妄言などに翻弄され騙されない正しい理解を得てもらいたいとして本書を執筆された。

「尻の穴も身のうち」と冗談めかして笑いながら話すのではなく、「ヒトがヒトである限り最後まで付き纏うお尻の病氣」を正面から衆知してもらおう、そのために本書は書かれており、大変な啓蒙となっている。

ここに目次をかかかって大要を案内する。

・第一章 序

・第二章 肛門とは何ぞや

- ・ 第三章 肛門（科）が極度の羞恥語の証明
- ・ 第四章 「痔」とは何ぞや
- ・ 第五章 旧ドイツ医学のプロクトロギー音痴の証明
- ・ 第六章 西欧プロクトロギー正史
- ・ 第七章 本間事件
- ・ 第八章 アメリカの大躍進
- ・ 第九章 近世日本プロクトロギー悲惨史
- ・ 第一〇章 観念論中国プロクトロギー
- ・ 第十一章 三大大肛直疾患
- ・ 第十二章 在来診は想像診…西欧プロクトロギーの歴史的欠陥、シヤガミ&イキミ論（三枝純郎）
- ・ 第十三章 羞恥心と外括約筋群
- ・ 第十四章 排便阻止三段構
- ・ 第十五章 今は昔
- ・ 第十六章 日本人の三大業績
- ・ 第十七章 結語

この案内を書いている小生は、著者三枝純郎氏の一才下であるが、氏の情熱には圧倒される思いである。

ドーランド医学大辞典にエイナス（Anus）なる語はさけられている。プロクトロギー（著者のいう下部消化器ないし大腸排泄科）の説明にある。代りに直腸が使用されているという。小生はかつて泌尿器科を七ヶ年ほど学んでいるから、毎日前立腺の直腸診をしていた訳であるが、

肛直なる概念でエイナスに指を差し入れていたことはないし、外括約筋群の解剖生理を考えながら診療したこともない。まさに恥かしながらである。小生の年代では学生時代に、ヘモロイドの硝酸銀局注療法、ホワイトヘッド氏手術を知ったのみであったから、三枝氏が「肛直管」を声を大にしてさげばれている姿に驚異を感ずるし、氏の永年の研究に敬意を表する次第である。医師にもすすみたい啓蒙的な専門書である。

（中西 淳朗）

〔羽衣出版有限公司、静岡市駿河区敷地二―二―十五、電話〇五四―二三八―二〇五一、Fax 同じ、B 五版、一三四頁、カラー写真八頁、九〇〇〇円・税別〕

川村 純一 著

『文学に見る痘瘡』

天然痘ウイルス感染症であるこの病気には痘瘡、天然痘、疱瘡、いも、まめ、椀豆瘡などなど、多くの呼称があるが、ここでは著者に習って痘瘡とする。この病気の呼称が多様であることは、すなわち痘瘡は人々に非常に身近な存在であった証拠であろう。この痘瘡について川村純一先生が前作『病いの克服―日本痘瘡史』に続いて、この度『文学に見る痘瘡』を上梓された。